P-037

成人病棟での実務経験を持ち、小児・混合病棟へ配属異動となった看護師を対象としたシミュレーション教育シナリオの開発

前田　留美[1]、石川　紀子[2]、堂前　有香[3]、齋藤　千晶[4]
[1]東京医科大学　[2]和洋女子大学
[3]千葉県こども病院
[4]岩田こどもクリニック

超少子高齢化に伴い、看護の対象者は大多数が成人、高齢者で占められる一方で、小児医療機関の縮小に伴って小児病棟の閉鎖、混合病棟化が進んでおり、それまで成人看護しか経験のない看護師が小児看護に携わる機会が増加している。

小児を対象とした看護は、子どもの発達段階に応じた看護介入、生理学的特徴を踏まえた全身管理、家族を対象とした看護介入といった成人・高齢者看護にはない特徴があり、成人病棟から小児が入院する病棟へ異動した看護師はこの特徴の違いに困惑すると言われている。先行研究では、これらの看護師の学習ニーズはあるものの、半数以上の施設で小児看護の特徴を学ぶ継続教育プログラムがなく、学習の場や相談できる機会が限定されていることが明らかになった。そこで新たに小児看護に携わる実務経験のある看護師を対象とした継続教育プログラムを開発した。本プログラムはeラーニング教材とシミュレーション教育の2部構成となっており、今回はシミュレーション教育で用いるシナリオを開発した。

まずeラーニング教材では、先行研究をもとに共同研究者間で検討を行い、学習ニーズが高いと考えられる「乳幼児の全身状態の観察」「乳幼児の身体的生理的特徴」「乳幼児のバイタルサイン測定を行うための工夫」「点滴をしている小児の看護」「プレパレーション」「入院している子どものストレスと看護」「入院している子どもの家族のストレスと看護」の7項目を学習する。次にシミュレーション教育では学習内容を統合し、実践する場面として①啼泣し続ける乳児、②処置を嫌がる幼児、③付き添いをしている母親への対応の3場面を想定し、シミュレーションシナリオを作成した。シナリオはNational League for Nursing（全米看護連盟）の「Simulation Design Template」、ならびに日本看護シミュレーションラーニング学会の「INACSLベストプラクティススタンダード」に基づいて、eラーニング教材の学習内容を実践の場面で考え実践するように作成した。

さらにアルファテスト（教育者が学習者役となったテスト）、ベータテスト（シナリオ作成に携わっておらず、学習者に近い立場の者によるテスト）を行い、最終的にシナリオを完成させた。今後、2024年7月以降に本プログラムを用いた研修会を実施し、プログラムの教育効果測定を行う予定である。

P-038

「幼児体験ツール」を教材とした学習効果 –IPE（多職種連携教育）による体験課題の考案–

黒岩　志紀[1]、澤田　優子[2]、伊藤　直子[3]
[1]森ノ宮医療大学看護学部　看護学科
[2]森ノ宮医療大学総合リハビリテーション学部　理学療法学科
[3]森ノ宮医療大学総合リハビリテーション学部　作業療法学科

【目的】
少子高齢化社会の中、高齢者疑似体験ツールが多くのメーカーから販売されている。高齢者の老化に伴う身体機能の低下や心理の学習として、教育現場や企業の研修などで導入されている。他方の、子どもに関する疑似体験ツールは存在しない。このような現状の中、株式会社京都科学が幼児期（2歳程度）の身体機能を成人の身体で体験できるツールの新規開発に着手している。今回、看護学科、理学療法学科、作業療法学科の学生を対象に意見交換型学習を取り入れ、試作の「幼児体験ツール」を教材として体験課題の考案、実践に取り組んだ。本研究では、取り組みの経過を含めて学習効果を報告する。
【方法】
研究デザイン：質問紙調査、質的帰納的研究
実施方法：①「幼児体験ツール」を装着して行う課題をチュートリアル形式（学科別）、合同ゼミナールで検討する②試作の「幼児体験ツール」を装着して提示した課題を行う③体験後、質問紙回答、グループインタビューの実施
期間：２０２３年6月1日～２０２３年7月３０日　<U>分析方法</U>：単純集計、χ²検定、質的内容分析
【結果】
３学科計２１名の学生が参加した。課題は、①ズボンを脱ぐ②ボーロをつまんで皿に移す→スプーンで口に運ぶ→皿を持って机に運ぶ③ボールを蹴る④座る→立つ→歩行（3m）が提示された。体験後アンケートは、肯定的な回答が主であった。学科等による回答の差は見いだせなかった。グループインタビューでは「IPEによる学習効果」「学習の深化」「幼児体験の推奨」のカテゴリーが抽出された。
【考察】
幼児疑似体験や幼児体験ツールを教材とすることで、子どもへの理解や子どもに対する知見の深化という効果がみられた。また、IPE取組による他職種の学習内容の相違の気づきから、専門性の理解が深まり、多職種連携の基盤の涵養となった。本研究で幼児疑似体験の可能性と幅広い分野、世代に普及させる意義が示せたが、この体験で何を学ぶことが可能なのかは次の課題としたい。「幼児体験ツール」の完成が待たれる。
【倫理的配慮】
所属機関研究倫理審査委員会の承認後、研究協力者に説明した上で研究協力同意を文書で得て実施した。

Presented by Medical*Online